
下校途中の坂道で

あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下校途中の坂道で

【Nコード】

N0885R

【作者名】

あゆみ

【あらすじ】

演劇部部員の男の子が先輩を口説き落とすために頑張ります。
ラブコメ。

（前書き）

楽しんでもらえれば幸いです。
少女漫画的展開を狙ったラブコメディです。

1・とある高校のとても愉快的な演劇部部員たち

「ああ、ロミオ。貴方はなぜロミオなの？」

「父がロミオと名付けたからです」

「ふざけんじゃねーよ」

ジュリエット役を務めるは、我が愛しの演劇部部长殿。とても見目麗しく、その姿は幾千の星達の瞬きでさえも霞むほど。劇の練習中にふざける僕の腹に打ち込まれる拳は、鬼でさえ逃げ出すであろう見事な凶器。しかしその心根はとても真面目で、優しく、可愛い。

優しく、時に厳しく後輩たちに指導をし、かつ自らも真剣に演劇に打ち込む姿は見ていて気持ちが良い。彼女はとても美しく、そして凛々しい人なのだ。

そんな彼女に、僕が想いを寄せるようになったのはごく当然の成り行きなのである。

その抜群の演技力で、彼女はよくヒロイン役に選ばれる。

彼女の相手役をやりたくて、僕は必死に演技の勉強をした。

そして僕の努力はいつしか実り、今回ついにロミオを演じることになったのだ！

神様ありがとう。

これで部長との接点を多く持てる！

ああ、どうやって口説き落とそうか。

部長はおそらく、少女漫画的展開に夢を見ている。ハーレクイン小説が愛読書だと言うのだから、まず間違いないだろう。

けれど同時に、彼女はとても恥ずかしがり屋だ。正攻法で行ってはきつとこれからの関係に支障をきたすだろう。ぎくしゃくした関

係にはなりたくはないし、さり気なく、部長の方から「あ、なんか好きかもしれない」という感じになるように仕向けることはできないだろうか。

*

「はぁーい、みんな注目っ」

演劇部副部长、ベンヴォーリオ（ロミオの親友）が楽しげに手を叩いた。

「作戦会議、はっじめっるよー！」

いえーっ、と部員一同から声上がる。どうして、僕は副部长に相談したんだろう。

「今回の議題は、『ロミオとジュリエットを現実世界でくっ付けるにはどうしたら良いか』です。はい、意見ある人」

「はいっ！」

元気よく手を上げたのはアンジェリカ（ジュリエットの乳母）だ。

「はい、なんですかアンジェリカさん」

「押し倒せ！」

「却下。不純異性交遊は全面的に禁止です。他に何かありませんかー？」

「はい！」

次に手を上げたのはマキューシオ（ロミオの親友その2）だ。

「はい、マキューシオ！」

「指輪を贈ってはいかがでしょう！」

「プロポーズでしょうかって話はまだまだ先の話ですね。他の人」

「はい！ 強引に唇を奪っっ」

「却下！」

「はい！ 舞台上で絶叫告白！」

「却下！ さり気なくって言うてんだろっが！」

「じゃあ屋上！」

「晒し者にする気か！ 他！」

「はい！ 恋文を靴箱に入れる！」

「古いわ！」

……とまあ、色々な意見が出た。

僕の為にありがとう。

他にもいくつかの案が出たが、どれもこれも少し……いや、かなり、いまいちなものだった。

さて、そうして部屋が一瞬静かになったときだ。

モンタギュー夫人（ジュリエットの母）が静かに、すつと手を上げた。

「はい、モンタギュー夫人」

「……今、シナリオを書きました。現実世界での親友として、舞台上では母として、わたくし、ジュリエットのことは知りつくしているつもりです」

夫人の手元には『ジュリエット攻略法』と妙にポップな字体で書かれたノートがあった。夫人は心底楽しそうに、どこか怪しげな笑みを浮かべ、それを僕に差し出した。

「わたくしの目に間違いがなければ、ジュリエットは確実にこの方法で落ちるはず。善処なさい、ロミオ」

役に成り切ったその口調。見た目とあまりにそぐわぬポップなノート。期待を隠そうとしつつもまったく隠れていない表情。

少し悩み、二分ほど唸り、僕は……

僕は、ノートを受け取った。

2・『ジュリエット攻略法』

「……ほう」

さすが親友、というべきか。

そこには、部長の好きそうなシーンや台詞がこれでもかと綴られていた。

「へえ、なるほど」

つまり、毎日少しずつ意識させていくことが大事と言うことか。

ふむ、これはすごい。見直しましたよ、モンタギュー夫人。

では、実践に向けて準備をせねばなるまいな。

近いうちに訪れるであろう幸せに、僕は思わず口元を綻ばせていた。

「ジュリエット、待っていておくれ」

呟いて、僕はぐっと拳を握った。

これより、ジュリエット陥落『下校途中の坂道で』計画を開始します。

3・実践

空は夕焼けに染まり、坂道を歩く私の影を黒く長く伸ばしていた。学校の帰り。

さつきまでは部活に勤しみ、ジュリエットを熱演していたところだ。何故だか、ロミオは最後まで姿を現さなかったのだけど。

「部長、今帰りですか？」

夕焼けに見惚れていて、長い影が一つ増えていたことに気が付かなかった。

穏やかなその声に振りかえると、そこには部活に顔を出さなかったはずのロミオが居た。

我が演劇部の期待を一身に背負う、見目麗しい男の子。

いつも、抜群の演技力で王子やらナイトやら、そういう格好良い役所をさらりと持っていく一つ下の彼。私は彼に、やんわりと笑顔

を向けた。

「ロミオも今帰りなの？ 今日の部活、出ていなかったのに」

私が入部するはるか以前からある、演劇部の掟。

本番が近くなると、リアリティを求めるために本名ではなく役名で呼び合うのだ。そのお陰で、年に数回は校内に横文字の名前の人間が急増する。まあ、この男だけは何度言っても聞かないのだけど。「先生に呼び出されてしまったんです。ピアス、ばれてしまって」

「ああ、それで」

「ええ、少し……二時間ほどのお叱りを受けました」

色素の薄い、男の子にしては少し長めの髪。それを長い指先で耳に掛けると、そこには鈍い銀色の物が鎮座し、わずかに光って主張していた。

丸っこいスペードの形のピアスは彼によく似合っている。だが、うちの学校は異常なまでに身なりに煩い。ピアスで停学処分になった子だって居るくらいだ。お叱りだけで済んだ彼は、運が良かったのだろう。

私は一つ溜め息を吐き、ロミオを見上げた。

私も女の子としては比較的背が高い方なのだけど、彼はもっと、少し見上げなければならぬくらい背が高い。

「馬鹿ねえ、もう少し年齢と環境にあつた悪事を選びなさいよ」

「例えば？」

そうねえ、と私は呟き、授業中にばれないようにメールをすると音楽を聴くとか、と答えを返した。そんなものは悪さの内にはいないもんと嘯く彼の腹に、私は真面目なよと軽く肘を打ち込んだ。

「それに、あんたが『もん』とか言っても全然可愛くないわ」

「知っていますよ。でもクラスの女の子たちにはなかなか好評です」

そう、存外もてるのだ。女の子たちの間で密かに『王子』と呼ばれるくらいに。

彼の傍には必ずと言っていいほど可愛い女の子がいる。だけどそれを見かけるたび、若干いらついたりしている事はコイツには内緒だ。恥ずかしすぎる。

「あ、でも、もちろん一番は部長ですよ」

「は？」

「やっぱりどの女の子よりも、部長が一番可愛いです」

ああ、もう、どうして。

どうしてコイツは、こういう恥ずかしい言葉をさらりと言ってしまえるのだろうか。言われるこっちは、恥ずかしくて死んでしまいたいそうになっているのに。照れ隠しにもう一度溜め息を吐いて俯くと、彼はそんな私を見て楽しげに笑った。

「ああ、そうだ。そんな事よりもね部長、僕、すごく試してみたい悪事があるんですよ」

「『試してみたい悪事がある』とかそう言うのは普通誰にも言わないものよ。何かあったとき真っ先に怪しまれるから」

良いじゃないですか、とからから笑う彼に私は本日三回目となる深い溜め息を吐いた。

「で、何がしたいの？ 酒？ 煙草？ それとも学校中の窓を割ってみるとか？」

「いや、酒も煙草も臭いからあまり好きじゃないし、この年齢で警察のお世話になるのもちよつと遠慮したいですね」

そうか、なら一体何がしたいのだろうこの男は。私の頭で思いつく悪事なんて、これくらいしかないのだけど。あとは……盗んだバイクで走り出してみることくらいかしら。

考えて、これも窃盗罪に当たるか、と心の中で呟いた。

「僕ねえ、一度でいいから部長の事名前で呼んでみたいんですよ。

あ、もちろん下の名前ですよ。役名でもなく、名字でもなく、下の名前」

「はあ？」

「……だめですか、“姫子”さん？」

悪戯っぽく笑う彼に、私は頭を抱えた。これだったら酒や煙草と答えられた方がまだ良かったのに。

「…絶対にイヤ。そんな名前、私のキャラじゃないわ」

「良いじゃないですか、愛らしい名前です」

そりゃあ、いかにも『お姫様』って感じの可愛い女の子なら良いわよ。でも私はそうじゃない。

「嫌なのよ。 “ 姫子 ” なんて、両親に申し訳ないくらい、私には似合わないもの」

「ジュリエットはロミオにとってのお姫様なんですよ？ それこそ、どんなに素晴らしいお姫様よりもずっと愛しい、一番のお姫様」

顔が、火照る。

目に痛いほどの夕陽の紅に、私は少しだけ感謝した。

これだけの紅の下でなら、きつと、顔の火照りもばれないだろう。

「じゃあ二人きりの時だけ、名前で呼ばせて下さい。もう何度も恋をしてきた仲ですし、いいじゃないですか」

「劇中での話でしょ」

この懐き様、どうにかならないものだろうか。

「現実でもお付き合いしてくれたりしませんかね？」

「あり得ない」

言っても、コイツの私への態度は変わらない。まるで懐っこい犬みたいにふわふわと尻尾を振って擦り寄ってくる。女の子たちの前で大人ぶっている彼とは大違いだ。

「冷たいなあ」

笑顔のまま、けれど少し落ち込んだように言う彼はいつもよりずっと幼くて、どうしたのと構ってあげたくなる。

だから、今日は……。

今日だけは、右手を貸してあげましょう。

そう思っただけの手は、酷く、熱を持っていた。

4・その後のお話

「ロミオ、お前にはわたくしに対する報告義務があります。さあ、語れ。数ある作戦の内のどれを使ったのか。『プレゼントはバラの花束・指輪を添えて送ります』作戦？ 『登校中・白馬の王子とご対面』作戦？ それとも『つり橋効果を狙え・恐怖の帰り道』作戦か？ さあ、どれだ」

あの後、僕と部長はお付き合いをすることとなった。そのことをモンタギュー夫人に伝えたところ、襟首をつかまれ、鼻息荒く詰め寄られ、今の状態に至ってしまった。

夫人、近いです。鼻息が顔に掛かります。

「『下校途中の坂道で』作戦で行きました。部長、すごく可愛かった」

「なんでもつとはじけた作戦を使わなかった！」

「え、だってこれが一番まともだった」

「……つまらん」

「そう言われましたも、他のはもう見るに堪えない内容のものばかりだったものですから」

「だから、見るに堪えないようなことをやらせて笑いたかったんだよ。親友の特権だろう？ 醜態を見て笑うのは」

「今度、部長に伝えておきますよ。親友を選ぶときは慎重につて」

「誰のおかげで成功したの？ わたくしのおかげでしょう？ 恩をあだで返そうと言うのか、この若造が」

襟首をつかむ手にきゅっと力が入る。もしかして、僕はここで殺されるのだろうか。

「楽しみにしていたのに。どんなにふざけた展開になるものか、すごく楽しみにしていたというのに……」

「ふ、夫人……のど……絞ま……っ」

今にも息絶えそうだけど、それでも僕はモンタギュー夫人には感

謝をしています。でも、もう少し長い幸せがあつたつて罰は当たらないと思うのです。苦しいです。死にます。

ちよ、ギブ。

やめて。本当に死ぬ。

「あ、ごめん死にそうだね」

襟首から手を離し、夫人はせき込む僕にざまあみろとでも言うように口角を上げた。

「泣かせたら、本当にオダブツするかも知れないから気を付けて」

「はい」

「でも、あんたは別に死んでも大丈夫よね？ 殺しても死ななそう
な気がするもの」

「大丈夫なものか！」

言うと、夫人は満面の笑みを浮かべて僕の肩を叩いた。

「大丈夫よ。姫子が目覚めの口付けをくれるから」

心底楽しそうなその声に、僕も思わず微笑んでいた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885r/>

下校途中の坂道で

2011年2月21日15時40分発行